

結婚と自立についてートマス・ハーディ、 ヘンリック・イブセン作品を足がかりに

04L065 吉田 正樹

序論

結婚について考えるとき、理論的に言えばそれはただ単に制度として捉えられるであろう。結婚制度によって当事者間の関係やお互いの権利が守られる。しかし、過去の時代のいくつかの文学を見ると、関係は守られる場合はあっても、人間の権利を守るものとして結婚が機能していたとは思えない。むしろ19世紀の文学では、結婚制度は人間を縛るものとして描かれている場合がしばしばある。その結果、それらの物語はどれも悲劇的である。このような事態は、現在無くなったであろうか。否、現代に至っても、そういった意味での「結婚」という意識は完全にはなくなっていないのではないのか。結婚が人を縛るものや苦しめるものとして働いてしまうケースは多いのではないだろうか。もちろん、直接的な束縛と無意識的に縛られてしまう場合の両方がある。現在でも結婚すると仕事を辞める女性が多い。当然それ自体に問題はないが、自分の能力が何なのか、社会の中でどのように生きていくのかが、全く定まっていないうちのころから「結婚する」という選択肢が生き方を決める上での当然の前提になっているのは問題である。その思いが強ければ当然、無意識的に自立が損なわれてしまうし、才能を発揮する機会が摘み取られてしまうであろう。そのような状態のまま結婚すると、多くの場合「結婚」は依存関係に入ることを意味するのである。

だからこそ、結婚のあるべき姿を考えると、必然的に「自立」という観点が非常に重要になってくる。結婚という制度によって、人間が縛られるという結果を招いた事実は過去にも現在にも存在する。だが本来、制度は人を縛るものではなく、守るためにあるべきものはずである。そうでなければ制度は存在する意味そのものがなくなってしまうであろう。だからこそ、特に形式化された慣習の強いヴィクトリア朝時代では、結婚制度と当時の社会性に対して、真っ向から批判的態度をとっている作品がある。結婚制度について言及する場合、当然ジェンダーという視点から見る必要があり、さらには男女の愛の問題ということにもなってくる。ヴィクトリア朝という強力な社会制度の枠組みの中で描かれたトマス・ハーディ (Thomas Hardy) 著『緑樹の陰で』⁽¹⁾ (1872年)、『ダーバビル家のテス』⁽²⁾ (1891年)、『日陰者ジュード』⁽³⁾ (1895年)、ヘンリック・イブセン (Henric Johan Ibsen) 著『人形の家』⁽⁴⁾ (1879年) を取り上げ比較していくことで、男女の愛の問題、男女の性を念頭においた結婚のあり方、人間にとっての自立とは何であるかという問題について以下に考察していきたい。

第1章 結婚における「社会」対「自然」

結婚が悲劇へと繋がっていく場合、両者はどのような関係なのだろうか。『ダーバビル家のテス』でのテス (Tess of Durbeyfield) と『日陰者ジュード』でのスー (Sue Bridehead) という二人のヒロインは、全く異なる性格でありながら、二つの作品に描かれた結婚が悲劇に変わっていくという共通点が見られる。従って、この二人を主にとりあげ、結婚が悲劇となるプロセスについて考えていきたい。

テスは、物語の副題にもあるように「清純な女性」(A Pure Woman)である。アレク (Alec Stokes-d' Urberville) に犯され、その時の子を生み、最終的には殺人までしてしまう女性を、ハーディは「清純な女性」として捉え、描いているのである。しかし彼女は当時のヴィクトリア朝の女性観においては、「清純」とは全く程遠い人物像であるといえるであろう。当時、男性が女性に抱いていた社会認識は非常に根強く、限定されたものであった。そこで、ヴィクトリア朝の理想の女性像とはいかなるものであったか、またその背景について、川本静子氏による論説を参考にしたい。

国力が急速な発展を遂げたこの時期、いわゆる「家庭の天使」の名で知られる良妻賢母の女性像が理想のモデルとして広く浸透していた。これは、工業化の進展が、男は職場、女は家庭という完全な分離をもたらしていたためである。生存競争である職場から帰ってきた男が、疲れを癒す安らぎと憩いの聖域として家庭が位置づけられていたのである。つまり、男を癒し、男の魂を清める天使の役割を女性が担っていたといえる。ということは、男性領域たる職場と女性領域たる家庭が相携えて産業資本に基づく社会の歯車を円滑に回転させていたということであり、「家庭の天使」とはイギリス産業資本がその支配権確立の一環として制度化した「理想の女性」に他ならないのである。そのため、当時の社会において女性が娘・妻・母という三つの役割以外に期待されることは決してない。女性が家庭にいて、癒しを与えることが男性にとっては、必要不可欠であったのである。そして、女性を家庭に縛り付けるために、女性という性に属するだけで、問題なく男性に劣る存在であるという社会認識が成されていた。⁶⁾

このようなヴィクトリア朝の社会的価値観から見たら、どんなに素晴らしい性格を持っていても、当然テスは「清純」とはいえないであろう。では何を持って、ハーディはテスを清純な女性と描いたのであるか。そこでテスの清純を理解するためには、「家庭の天使」などの女性イメージを抱かせていた社会観とは全く異なる視点に立つ必要があるのではないだろうか。つまり、彼女を「清純」たらしめている大部分は、彼女の中の「自然」性によるものなのではないだろうか。社会性によって形作られる人格とは全く異なる、別の「何か」が彼女の根本に存在するのである。

彼女は一般に認められている社会の掟は無理に破られたが、自らをその中の異分子だと勝手に考えている「(自然の) 環境」に知られている掟には決して背いていなかったのである。(137)

ハーディは、テスを通して人間の中にある「自然」性と、「社会」性との違いをはっきりと読者に突きつけているのである。ここでの「社会の掟」とは、結婚した相手との節操を守るという当時の社会性の一部である。当然、結婚という制度に対する社会全体の捉え方が社会の掟に含まれている。この社会性とテスの「自然」な生き方は一致しない。結婚していない相手との関係を持ってしまったことは「家庭の天使」などの理想化された女性像には反するのである。しかし、ここでテス自身は「自然」に対し、「自らをその中の異分子だと勝手に考えている」という点も重要な点であろう。つまり、テスは社会の中に生きる人間としての一面を自分として受け入れているのである。しかし一方で、実際は「自然」という価値基準の方がテスの土台となっている。このような性質をテスに与えることでハーディは見事に、彼女が社会性の一部である「結婚」という制度のなかで生きていけない様を描いているのである。

テスはエンジェル (Angel Clare) と念願の結婚を果たすが、アレクの強姦について打ち明けることで、その幸せは一瞬にして崩れ去る。エンジェルは告白を聞いた後、彼女に対し「以前の君と、今の君とは別の人だよ」(355) という。さらに彼はテスの生い立ちまで攻め立てる。「社会が違えば風習も違うものだ。それでは君の事を、社会的なものごとの釣り合いというものを教わったことのない無知な百姓女だと、僕に言わせるようなものだよ。」(362) ここで何故身分や生い立ちがテスの人格を責める根拠に使われなければならないので

あろうか。アレクに強姦された際、テスには選択の余地がなかったこと、彼女の性格に何ら要因がないことは冷静に考えれば、明白である。しかしだからこそ、エンジェルは、当時の社会性やテスの身分などを問題として非難することで、相手を許すことのできない自分や彼女から去っていく自分を正当化しようとしているのではないだろうか。これは、エンジェルにとって真実であるはずの「テスに罪はない」ということ、「テスを愛していること」を認めない要因が、紛れもなくエンジェルの自然な思いによってではなく、「社会性」に偏った価値観にあるということを表している。つまり、エンジェルの中の「社会性」が事実を歪曲させているのである。さらにいえば、社会全体の女性への共感が深まれば、エンジェルはテスを許すであろうし、無理やり強姦されたテスをかっかいそうだと思ひ、責めるどころか大事に思うはずである。エンジェル自身のこのような価値観の狭さは社会性によるものであり、エンジェルもまた自分の本当の気持ちに気づくことができない社会の犠牲者といえるであろう。実際、物語の後半でエンジェルは「君についての僕の考えは間違っていたのだ。僕は本当の君が見えなかったのだ」(586) といっている。だが、その時はすでに遅すぎた。このときテスを認めることができなかったことが、取り返しのきかないさらなる悲劇を生んでいったのである。

テスは出て行ったエンジェルが戻ってこないことに絶望感を感じる。彼女は法律上エンジェルの妻であるが、それが何の意味も持たないという状態に立たされているのである。そして、言い寄ってくるアレクに対して、「肉体的な意味ではこの男だけが夫であるという意識がだんだん重くのしかかって来るように思えた」(556) と認識し始める。この後、実際にテスはアレクのもとへ行くことになってしまう。この要因となるものは、経済的にアレクに助けられることなど、現実の日常生活の中での出来事による。エンジェルとは「結婚」だけであり、全く会うことができない遠い関係であるのに対し、アレクは目の前に存在する。法律上の結婚の効力よりも、目の前の要求、必要性の方がテスにとって決定権をもっているのである。つまり、ここで法律上の結婚と男女の関係が対比され、どちらが重要なのかという結婚制度に対する問いが提示されているのだ。結果的に、テスはアレクとの関係を選ばざるを得なくなっているということからも、結婚という制度よりも日常の中での必要性のほうが重要視されているということは明確であろう。しかし、あくまでテスは人生の選択を好むと好まないに関わらず、自分にはどんな選択肢があるのか、という視点で選んでいるだけなのである。そういった意味で、テスの「清純」が損なわれることはないのである。不幸の要因となるエンジェルへの罪の「告白」も彼女のそういった性質によって成されたといえる。社会的価値観から見たら、許されないことでも、彼女の「自然」性から形作られる無垢な価値観によれば、告白しなければならぬことであり、また許されるべきことなのである。前述の彼女の中の社会性による人格とは全く異なる別の「何か」とはこのような彼女の「自然」性からくる彼女特有の「自然体」な姿勢であり、無垢な性質なのである。しかし、周りの環境の「社会性」がそんな彼女を追い詰めていくことで、逆に「自然」ゆえの「清純」さが不幸を生んでいくのである。

テスとエンジェルの愛においては、このように結婚という制度が彼らを守るように機能せず、逆に彼らを翻弄し、関係を壊していった。一方、『日陰者ジュード』ではどうだろうか。スーが愛するジュード (Jude Fawley) と結婚しない、ということが最もテスと異なる点であろう。つまり、この小説では完全に結婚を拒否した関係として、スーとジュードが描かれているのである。ハーディは、この作品において、『ダーバビル家のテス』より、さらに強く結婚制度を批判し、新しい男女の関係性を示したと解釈することができる。そして、その関係を作り上げているのが、紛れもなくスーなのである。スーは「家庭の天使」などの見方が主流であった時代に提示された、新しいタイプの女性であるといえる。

スーは社会的制度に対し、異常な嫌悪感と反抗心を抱いている。それは結婚についても同じことがいえる。だが、社会的因襲は非常に根が強く、一個人が否定したところで簡単に拭き去ることはできない。そのため、スーは意志を強く保つことができず、時に回りの人物や状況によって意見ががらりと変わったりもする。結果、人格が一貫しておらず、矛盾があり、簡単に捉えることはできないスーという複雑な人物像が出来上がる。ス

一のこの不可解な性格を具体的に紐解いていかなければ、彼女とジュードが悲劇へと進むプロセスは正確に見えてこないであろう。

テスの無垢な性格とは異なり、彼女は自分で考え、自ら闘っていく女性である。結婚に対しても、最初から強い懐疑心を持っている。だが、その一方で彼女はフィロトソン (Mr. Phillotson) とは結婚し、離婚し、また彼と結婚するという奇妙な決定をしていく。これらのスーの行動は、結婚に対する考えそのものが覆される状況であり、通常ありえないことだろう。しかし、不思議にも彼女には最後の悲劇に至るまで、彼女特有の知性が感じられるのである。

自然体であり、自分の愛する者には非常に従順なテスと異なり、スーは知性に溢れ、非常に観念的な女性である。テスが愛するエンジェルに従順であるのに対し、その気性ゆえに、スーはジュードを自分の生き方の模索に巻き込んでいってしまう。彼女がジュードの意思を尊重することはほとんどといってない。ジュードの夢の追求はスーの影響で加率的に変化していってしまう。ここに、彼女の性格の大きな問題点があると感じられる。

では、どのようにスーはジュードを変えていったか。「ジュードはスーに導かれて、結婚制度、さらに進んで学問、宗教という社会の「鋳型」の不合理に目覚めていく。」⁶⁾ 学問はジュードの生きる指針であった。クライストミンスターに憧れて、半生を過ごしたといってもいい。そのようなジュードにとっての中心的な事柄に対しスーは反抗心を見せている。「クライストミンスターにおける知性は、古い皮袋の中の新しい葡萄酒のようなものね。クライストミンスターの中世主義は消え去らねば捨てられねばならないわ」(上巻、258)と痛烈な批判をしている。ジュードはこのような彼女との論議で、徐々に変わっていく。ジュードは、「僕の信条と僕とは袂を分かちはじめているんです」(下巻、38)と変わっていく自分を自覚しながら、それでもどうしようもなく、スーに惹かれていく。ジュードにとって、スーが最優先事項となっていくのである。そのため、スーに影響され、翻弄されていく運命を辿ってしまう。

ジュードとスーの関係における最初の衝突は、スーの結婚であろう。この結婚の動機は以前ジュードがアラベラ (Arabella Donn) と結婚していたことを告白されることによる。スーは衝動的に結婚してしまうのである。しかし、スーはジュードへの手紙に次のように書いている。

結婚式について調べましたが、花嫁の引き渡し役が必要とされているのは、とても屈辱的なように思われます。そこに記されている式次第によれば、新郎は自らの意思で私を選ぶのですが、私は新郎を選ぶのではないのです。誰かが牝驢馬か牝山羊か、あるいは、その他の家畜か何かのように、彼に引き渡すわけです。(上巻、294)

これから結婚する女性の言葉とはとても思えない。ここでは、女性の立場から、結婚における儀式への懐疑心が表わされている。スーは結婚する身でありながら結婚に対し、嫌悪感をむき出しにしているのである。

そのようにして始まった結婚は当然、破綻する。スーは結婚してすぐに不満をあらわにする。

もし、結婚式というものが宗教的儀式ならば、それはまちがっていることでしょう。だけど、もし結婚式というものが、家事とか地方税や国税の賦課とかに物質的便宜があることや、男親をはっきりさせて、土地や金を子どもに相続させることなどにもとづく金銭契約ならばどうもそのようだけれど、そうならば、男なり女なりが、結婚は自分を傷つけ苦しめると言ったって、世間に言いふらしたって、いっしょじゃありませんか？ (下巻、28)

スーは結婚を「金銭契約」などの権利を守る制度として捉えている。また、周りの結婚の全てが、そのようなものだと決め付け、そんな自分に対して自覚的である。だからこそ社会性によって形作られる男女の関係に、彼女は決して身を委ねることができないのである。さらに、スーはいう。「私をこれほど苦しめるのは、この人が望むときはいつでも応じなければならぬことです。一道德的に立派な人であっても！一本来自然の衝動にもとづくものなのに、特別な感じ方をしなければならぬという恐ろしい契約なんだわ！」（下巻、34）ここで、『ダーバビル家のテス』同様、「自然」対「社会」の図式が浮かび上がってくる。ハーディはスーにこのように語らせることで、男女の関係は本来、「自然」性によってもたらされるものであると主張しているのである。実際はどうだろうか。男女がお互いに惹かれあい、相手を求める場合、そこに感性的な衝動があるという事実は否定できないことであろう。そして、それは純粋であればあるほど、お互いが「自然」に求め合うものである。しかし、そこに結婚が介在することによって、男女の関係は純粋な愛によって形作られるだけでなく、可能性が生じるのではないだろうか。結婚という制度によって、相手に対して思いがなくても、関係を強いられるという事態が生じてしまうのではないか。結婚は両者のうち、一人でも不満を持ち始めれば、無理に関係を縛る理由になってしまう。さらに、容易に離婚はできないという事実が拍車をかける。当時のヴィクトリア朝では、現代よりもさらに離婚という選択肢はなかなかでてこない。だからこそ、そこに愛がなくとも関係は持続されるのである。だが、スーは自分の考えを変えることができない女性である。スーは自分の結婚について、「あんなに無知のままにやったことは、やり直すことを許されるべきだわ！」（下巻、39）という。そして遂に、スーはフィロトソンに別居を願い出る。その結果、フィロトソンは願いを受け入れ、さらには完全に離婚を許可することにする。

こうして、スーはジュードと暮らすようになる。しかし、二人は当時の社会においては、とても幸せとはいえない形で毎日を過ごすことになる。それは、スーが結婚を拒否したことによる。ジュードは、「僕たちふたりだったらー」（下巻、121）とスーとの結婚へ希望を抱いている。しかし、そんなジュードに彼女は結婚について次のようにいう。

ジュード、私、こう思うのよーあなたが役所のお墨付きのもとに私を大切にするという契約をして、同じ屋根の下で私があなたに愛されることが認められると、そのとたんに、あなただけを恐れるようになるんじゃないかって。（下巻、121-122）

この言葉の中に、スーのジュードとの結婚への恐れが如実に表れている。彼女には結婚に対する信用は一切ない。それは彼女が元来持っていた社会への反抗心によるものともフィロトソンとの結婚の経験からともいえる。この言葉に表れている結婚への懐疑は彼女の思い込みであろうか。結婚によって当事者たちの関係は法律上守られるので、多かれ少なかれ「安心」が与えられる。だが、その安心感がマイナスに働く場合もあるだろう。安心は人間の幸福感に影響を与える危険性があるのではないだろうか。男女間の幸せ、愛する人ということへの感動や感謝は、「当たり前」という感覚によって生まれるものではない。むしろ、男女の関係は、同じ時を過ごすという奇跡のような出来事のなかで、相手を惹きつけることによって生じるのではないだろうか。しかし、社会によって守られる「安心」が、「当然」という意識に変化してしまったら、どうなるだろう。おそらく、日々への感謝が少なくなるであろう。そうすれば、相手への思いも薄れてしまう恐れが出てくる。少なくとも恋人同士のような衝動はなくなってしまおう。さらには、自分のことしか考えず、相手の人格を尊重しない場合なども出てくるかもしれない。このような危機感がスーの結婚への考えを支配しているのである。スーはいう。「法律上の義務から生まれる態度って怖くありません？情熱の本質はその無償性だということに、そうした法律上の束縛は情熱を損なうものだとお思いになりませんか？」（下巻、146）従って、スーはジュードとの

関係を大事に思うがために、あえて結婚しないのである。

そんな中、思いがけずジュードはアラベラとの間に子どもがいることを知らされる。その子を預かるようにアラベラにいわれ、ジュードとスーは受け入れることにする（以下、その子をリトル・ファーザー・タイムとする）。そして、二人は結婚していると周りに偽り、生活することになる。いうならば、この期間の二人の関係は現代における「事実婚」といえるであろう。ハーディはヴィクトリア朝時代にすでにこの新しい男女関係を提示していたのである。二人は当時の時代において、幸せになれるであろうか。否、二人の関係は、社会に認められず、排除されていくのである。二人は、周囲の人々によく話題にされ、決して理解されない。結局、周囲の無理解と好奇のまなざしに耐えられず、スーとジュードは「遊牧民風の渡り歩きの生活」（下巻、212）を始めることになる。ここでもこのような生活を強いられるようになったのは「社会」性のせいであるといえるであろう。その後スーは二人の子供を生み、さらに身籠っていた。そんな彼らに部屋を貸してくれる貸家は当時ほとんどなかった。それが、さらなる悲劇を生んでいく。

リトル・ファーザー・タイムは部屋を貸してもらえなかった後に、「ぼくは生まれてきてはいけなかったんだね？」（下巻、257）といっている。彼は自分たち子供がいるから、ジュードとスーが幸福ではないと感じたのである。そんな彼に対し、スーはほぼありのままの気持ちを正直に話してしまう。「人間はこの世にいるより、この世から消えた方がいいんじゃないでしょうか？」（259）というリトル・ファーザー・タイムに「そのようね、坊や」と返答している。その翌朝、彼は子供二人を殺害し、自らも命を絶ってしまう。床の上一枚の紙切れがおりてあり、そこには「ぼくたちはおおすぎるのでやりました」（265）と記されていた。

この悲劇的出来事によって、スーの人格は大きく変化する。「少年と話し合ったことが悲劇の主因だったという恐ろしい確信が、彼女を、弱まることのない痙攣的苦悶のなかに投げ入れたのである」（265）というように、彼女の精神は崩壊する。そのせいで彼女特有の知性は消え去ってしまうことになる。スーはそのような悲劇を生んだ理由、ジュードとの関係について次のように述べている。

自然が私たちに与えてくれた本能を一文明が自ら防げる任を買って出た本能を一なんにせよ喜び楽しむことこそ、自然の意図であり、自然の法則であり存在理由なのだ、と私は言ったわ。なんて恐ろしいことを言ったものでしょう！今こそ、自然の言葉を真に受けるほど愚か者だった罰に、運命は私たちの背中をこうやって突き刺したのよ！（270）

ここで、「自然」対「社会」の図式において、結局「社会」によって人は守られていることをスーは認めるのである。ジュードとの関係を選んだことは、スーにとって自然的な純粋な愛によるものであった。その愛を選んだために、フィロトソンと離婚し、ジュードと法律上の結婚をせず、事実婚を貫いてきた。彼女の社会への反抗は、彼女の生き方の指針であり、彼女の知性の源であった。しかし、この究極ともいえる悲劇は、そのような道を選んだために招いてしまったと彼女は考えたのである。

では、実際、自然性は社会性に劣るのであるだろうか。ハーディは、スーの精神が崩壊することによって、自然的価値基準を持った人物が悲劇に至ってしまう世の中の構図を明らかにし、社会的価値観の正誤を問いただしているのだと私は考える。それはテスにもいえることである。テスはアレクに強姦されたとしても、自然的価値基準からすれば、当然変わっていないのである。ハーディは「有機的自然界にゆきわたっている回復力は、処女性にかぎって拒まれているはずはない」（『ダーバビル家のテス』157）という言葉で示している。しかし、社会的価値観に支配されているエンジェルはそれを決して許すことができなかった。それがエンジェルとテスの関係の破綻する要因となった。そして、様々なすれ違いが生じ、最終的にテスはアレクを殺害してしまう。彼女にとってエンジェルとの愛を保つためには、その殺害の道しか残されていなかったのである。「あの人を

殺したんだから、あなたはきっと赦してくださるだろうって。あのようになれば、あなたを取り戻せるだろうという考えが、輝く光のようにパッと心に浮かんだのです。」(597) この言葉からテスがアレク殺害に全く罪悪感を抱いていないことがわかる。テスはただエンジェルと一緒にいるための唯一の手段として、捉えているだけなのである。つまり社会的価値観によって「自然」的な価値に基づいた選択肢は狭められ、残された自由のための決断がテスにとって殺害だけであった、といえるであろう。そして、テスは「裁き」を受け、この世を去ることになる。テスは愛する人に非常に従順な女性である。彼女にとっての最大の悲劇は、愛する人と共に生きられない、ということなのだ。ハーディはこのようなテスの人間性に基づいて考える最大の悲劇を迎えさせることで、結婚制度や世間の風習などに対して、人々を支配している狭量な社会的価値基準に対して、明確な批判をしているのである。一方、スーにとっての最大の悲劇とはいかなるものだろう。それは、彼女の社会への反抗心が折れ、社会に服従せざるを得なくなることである。テスの行動がエンジェルとの愛のためだけであるのに対し、スーの生き方は知性による「社会性」との戦いである。彼女の個性が絶対に受け入れられないものに、あえて敗北し、従っていくことが彼女にとっての究極の悲劇なのではないだろうか。それが、フィロトソンのもとへ戻って再婚するということなのである。スーにも、テス同様おおよそ考えられる彼女の最大の悲劇が与えられているのである。

スーのこの結末は、このように彼女の個性が社会によって捻じ曲げられたことを表すものであるが、だからといって彼女の性格に全く問題がないわけではないだろう。それはテスも同様にいえることである。両者が不幸になっていく原因には、彼女たち自身による問題もあるであろう。スーは、自分の意見を持ち、はっきりと主張できる女性である。だからこそ、当初から社会的価値観に真っ向から反抗してきた。しかし、結局彼女にとって「社会」の存在は巨大で、彼女の人生は逆に社会に翻弄されていたとも考えられるのではないだろうか。自ら決定していくタイプの女性であるように描かれてはいるが、実際は社会の中で自立していくことはおおよそ不可能であったと解釈できるのではないか。このように、テスとスーには「自立」という観点から見ると大きな欠点があると私は思う。そのため、「自立」という観点から、彼女たちの問題点を以下に明らかにしていく。

第2章 自立と結婚

「自立」とは社会の中で実現される事柄である。社会性とまったく切り離れた状態で孤独に生きることを「自立」とはいえないであろう。「自立」ということは、自ら考えて物事を「選択」していくことから始まる。スーはフィロトソンとの結婚を、ジュードの告白の直後すぐに決断してしまった。人生の中で非常に重要な決断があまりにも軽薄になされたといえるであろう。「したがって、彼の秘密をとつぜん聞かされた腹立ちから、フィロトソンの主張に屈伏する羽目になったのだと考えざるを得なかった。」(294) このジュードの推測は事実である。つまりスーは知的で聡明な女性であるが、結局自分の知性によって、自分の人生に非常に重要な選択を選択していないのである。この結婚から、スーはジュードとの愛は社会と敵対した位置で育んでいかなければならなくなった。さらに、リトル・ファーザー・タイムに話している際も、彼女はあまりにも彼への配慮を怠っている。自分の観念に基づいて、少年にその一時の残酷な本当の心情をそのまま話してしまっている。非常に軽率な行動であり、それによって不幸を招いてしまうことは当然のことであるといえる。スーには観念的でありすぎるために、逆に非常に簡単に自分の心情だけで物事を決めてしまう軽率さがあることがわかる。従って、スーは知的な個性を与えられ、新しいタイプの女性でありながらも、決して自分でしっかりと選択していく「自立している女性」とは、とてもいえない人物である。それはジョードにも当てはまる。彼はスーが

全ての決定権になってしまっており、自らの考えによって「自立」した男性とは到底言えない。では、テスの場合はどうであろうか。テスはスーと全く異なる人格であるが、やはり彼女も自立した女性とはいえないであろう。テスの場合は、金銭的な面からも自立できない理由が見て取れる。金銭面の援助のために、アレクとの関係の中に入ってしまうのである。これには、当時、農村の女性はおろか中産階級の女性でさえ金銭的に自由の身を勝ち取ることが困難だったことなど、いくつかの要因がある。しかし、自分を踏みにじったアレクの下に行くという決断しか選択肢になかったということは、社会性により、テスの「自立」の芽が奪われていたとあっていいであろう。そして、アレク殺害の際も選択肢はなく、ただエンジェルと共にいたいという気持ちによってだけで、突発的に行動を起こしてしまっている。

軽率な決断をしてしまう女性はハーディの初期作品からも見られる。喜劇的作品である『緑樹の陰で』のファンシー (Fancy Day) はディック (Dick Dewy) と婚約の身でありながら、牧師であるメルボルト (Parson Maybold) に一瞬惹かれてしまう。ディックを愛している彼女の気持ちは真実である。ディックが雨にぬれて去っていくとき、ファンシーは「私、ディックが好きなの。それに、彼を愛しているわ。でも、雨の中で、かさもなくずぶぬれになるなんて、なんて気の毒にみすばらしく、男は見えるんでしょう。」と心の中で思った。心の中で嘘をつく必要はないので、ファンシーのディックへの思いは本当であることがわかる。しかし、同時にこの言葉の中には、彼女がずぶぬれであることを嫌悪することにより、その愛の危うさを予感させている。その後すぐに、婚約の事実を知らない傘をさしたメルボルト牧師がやってきて、ファンシーに求婚する。メルボルトは自分の誠実な愛と、これからの二人の生活について話し始める。ファンシーは、最初求婚を断ろうとするが、その後は動揺し、耳を傾けるばかりである。メルボルトはヨークシアに引越すことを話し、次のようにいう。

あなたの音楽の力もずっと伸びますよ。好きなピアノも買ってあげましょう。何だってあげますよ、ファンシー、あなたの喜ぶものなら何だって。一子馬の引く馬車や、花や、小鳥、楽しい社交界など。そう、私と一緒に数ヶ月も旅すると、どんな社交界にも十分なものが身につきますよ。ね、ファンシー、私と結婚してくれませんか。(230-231)

この誘いを聞いてファンシーは結局「ええ、いたしますわ」と承諾してしまう。彼女は洗練されている女性であったが、突然このような軽率な態度を取ってしまうのである。その後結局メルボルト牧師がディックとファンシーの婚約に気づき、彼は諦めることになる。ファンシーは手紙にて以下のようにメルボルトにいう。

それは私の性質—多分すべての女の性質でしょう—心と振る舞いの洗練さを愛することは、いいえ、これだけではないのです。習慣としてきたもの以上に、優雅で贅沢な環境について思いを魅せられることは、それに、あなたは私をほめてくださいます。ほめられることは、私には生命なのです。私がかんたんにお返事したのもこうしたことにかき立てられた、私の感情のせいなのです。(237)

彼女は決して性格が粗悪なわけではなく、むしろ非常に誠実な女性である。だからこそ、このように正直に自己分析することが可能なのである。そんな彼女を軽率な答えに至らせたのは、メルボルトの誘惑に反応した彼女の「性質」によるものである。洗練さに惹かれることは、虚栄心によるであろう。その虚栄心がディックを愛していることを一時忘れさせてしまったのである。確かに彼女の行動は軽率であるが、しかし、こういった気持ちを全く持っていない人間はいるのだろうか。「洗練」を重んじるように社会性の中で育てられ生活してきたら、当然自分にとってそれは大きな価値基準になるであろう。また、ほめられることは自分に自信を持つこ

とを可能にし、生きていく上での幸福感に繋がるかもしれない。そして、誰しもが現在より良い状況へ、より輝いている道へ進みたいという気持ちを多かれ少なかれ抱いているのではないだろうか。多くの場合、そういった道が突然提示されたら、ふいに魅力を感じてしまうのではないだろうか。

では、そのような誘惑に流されないようにするにはどうすべきなのだろうか。それは、依存的な人格ではなく、しっかりと「自分」を持つということに他ならない。ファンシーに欠けているのは、「自立心」ではないだろうか。自分に対して責任を持っていたら、ディックとの愛を踏みこじめることはなかったであろう。自分にとって最も大切な人物はメルボルトではないのだから。さらにいえば、メルボルトが話した新生活の誘惑がどれだけ魅力的であっても、自ら人生をしっかりと選択していく女性にとってすれば、愛していない男性に援助された上での華やかさを否定するであろう。

その後、メルボルトは、「彼にすべてを話しなさい」(238)とファンシーに伝える。しかし、結局彼女はディックにその出来事を秘密にしたまま、結婚することになる。この小説は『ダーバビル家のテス』や『日陰者ジュード』のように悲劇を提示してはいないが、やはり結婚が不幸へと向かっていくような確信にも似た予感を持たせる。ファンシーは結局秘密を持ったままであり、ディックは彼女を完全に信頼しきっているという二人の矛盾した関係が解決されることは最後までない。結婚式の前に、すでに夫婦間の歯車が狂い始めているのである。しかも、それは人間の非常に本質的な「性質」が原因となっている。ハーディはファンシーの矛盾した行動に対して、読者に共感を与えるような理由付けしている。喜劇的に描かれているにもかかわらず、人間の本質にある問題点を土台としたハーディの結婚に対する懐疑的な意識がしっかりと描かれているのである。

ファンシーの持っている秘密が、ディックとの結婚における最も大きな陰を予感させるということは興味深い点である。秘密を持つことで信頼関係に大きく影響するのは当然だろう。愛する人が完全に隠し事のない関係と信頼を寄せているにも関わらず罪の告白をしないということは、相手を裏切っていることになるだろう。だからこそ、読者は悲劇的出来事が直接描かれていなくても、ファンシーとディックの関係に不幸を連想するのである。しかしここで、ファンシーはメルボルトが勧めるように告白すればよかったのか、という疑問が生じてくる。おそらく、ファンシーにとって告白することが救いの道にはならないであろう。ディックは純粋で、傷つきやすい性格であり、告白後ファンシーを同じ気持ちで愛していく強さを持っているようには思えない。告白したとしても、良い結果は生まないことがファンシーにはわかっているのである。ここでテスの場合を考慮したい。テスはエンジェルに対して処女性の喪失や赤ん坊がいいたことなどについて秘密を持っていた。しかし、彼女は結局秘密をエンジェルに包み隠さず話すことにする。その結果、エンジェルは彼女をどうしても許せず、二人にとっての不幸を招いてしまう。このように、男女関係において秘密を告白することが不幸を回避する方法、とは必ずしもいえないであろう。

秘密が自立へと目覚める契機として描かれている作品『人形の家』(1879年)をとりあげ、さらに考察を深めていきたい。この戯曲はハーディと同時代の劇作家ヘンリック・イブセンによって書かれたものである。

弁護士トラヴァル・ヘルメル (Torvald Helmer) とその妻ノラ (Nora Helmer) は一見満足な生活を送っていた。しかし、ヘルメルの部下であるクロークスタ (Nils Krogstad) がノラの前に現れることで夫婦関係は危険にさらされることになる。ノラは夫に対して、どうしても言えない秘密があった。それはノラが夫ヘルメルを助けた過去である。以前ヘルメルは精神的病に陥り、彼には遠くの土地への療養が必要不可欠だった。彼女は考えた挙句、ヘルメルには父からお金が出たと嘘をつき、クロークスタにお金を借りてようやくその療養を実現させたのである。このような方法をノラが取ったのは、当時妻は夫の承諾なしにお金を借りることは容易にできなかったためである。それ以来、ノラは夫に気づかれないようにクロークスタに分割払いを続けていた。これが彼女の持つ秘密である。ノラはこの自分の秘密に対し、誇りさえ抱いている。「この秘密を私は喜

んでいるし、誇りにも思っているのに—」。(247) 金を借りたことは、彼女が自分で選択し、満足している事柄なのである。命を落としそうな夫を自分の力で助けたことがその後の彼女の自信に繋がっている。しかし、そんな彼女の誇りが、彼女を苦しめていく要因となってしまう。

クロークスタは、ノラを脅しにやってくるのである。それは、ノラが借用書記載の際、父が書くべき保証人の欄を偽造して、彼女自身が書いたという法に触れる事実をクロークスタが気づいていたためだった。彼は法律上の罪であることを指摘し、ノラを追い詰めていく。そんな法律に対し、彼女は「年取って、死にかかっている父親の心配と苦勞を取り除こうとする権利を、その娘が持つてはいけないっていうんですか？夫の命を救う権利が、その妻にないっていうんですか？」(249) と反抗心を示している。しかし、法律が動機を問うことはないので、彼女を苦しめていくことになる。この時からノラは秘密が暴露されてしまったら、家庭が壊れてしまうという危機感を強く意識し、結婚生活を守るために奔走することになる。ヘルメルはクロークスタを快く思っていないので、やがて彼を解雇する気でいた。しかし、ノラは彼を辞めさせないよう夫に説得を試みる。しかし、ヘルメルは全く彼女の言うことに耳を貸さない。

クロークスタはさらに、明らかにノラをゆすってくる。それは銀行においての彼の地位を上げてもらいたいというものである。ノラはこのとき自分の罪について悩み、家を出て、自殺することまで考える状態に陥っている。しかし結局、クロークスタはヘルメルを直接脅すために、その秘密を暴いた手紙をヘルメル家の郵便箱に入れて帰ってしまう。ノラはヘルメルに読ませないように努力したが、無駄な努力であった。ヘルメルがノラに愛の言葉を示したあと、彼女はとうとう手紙を読まれることを決意する。ヘルメルは「私はときどき思うんだがね、おまえにとっても恐ろしい危険が迫って、そのため財産も命も、何もかもを賭けて、おまえを救うことができればいいなあって」(278) とノラに告げる。そこで彼女は「(身を振り放し、きっぱりと、決心したように言う) さあ手紙を読みなさいよ、あなた！」と返した。

手紙を読んだ後のヘルメルは瞬時に別人のようになり、ノラを攻め立てる。「偽善者で、うそつきで、一ひどい、もっとひどい—犯罪者だったなんて！」(279) 彼はもう自分の体裁しか考えていない状態であり、完全に被害者意識に支配される。

おれまで、おまえの犯罪行為を知っていたという嫌疑をかけられるにきまっている。世間では考えるだろう、俺がその背後にかくれていたにちがいないって—もしかすると、おまえをそそのかしたのかもしれないと！それもこれもみんな、結婚してからずっと、手の中の珠のようになってかわいくなって来たおまえのせいなんだぞ。(279)

これらのヘルメルの言葉を聞いている際、ノラは一言二言答えるだけで、後はひたすら黙っている。これだけの批判を受けながら、彼女は冷静に傍観しているのである。そして、傍観しながら急速にノラは大事ことに気づき始め、目覚めていくのである。

その直後、クロークスタが改心したことを知らせる手紙が来る。それを読みなり、ヘルメルは手を返したように、喜ぶ。「こんなおはなしいっさい夢だったことにしよう」(280) とノラを許そうとする。しかし、その時はもう彼にとって遅かった。ノラは攻め立てられたことを機会とし、ヘルメルに対する強い依存から脱却し、既に大きく視点を転換していたのである。

その後のノラは完全に人格を変えたようである。「総決算なんです」(281) といい、本心を話し始める。「あなたもパパも、あなたたちは私に対して大変な罪を犯したんです。わたしが何一つできないってことは、あなたたちの罪ですわ。」(282) ここでの罪とは、ヘルメルがノラの人格を尊重していないということであろう。人間としてというより、自分の所有物のような感覚で彼女をかわいがっていただけなのである。事実彼は、ノ

ラが自分を助けたと言う事実をまったく無視して責めた。彼女の意思や犯罪に至る過程は彼にとってどうでもいい事柄なのである。もし人間として深い愛があるならば、相手の気持ちを重要視するだろう。しかし、彼はただ自分の思い描く女性ではないこと、自分に迷惑をかけることが許せないのである。しかしヘルメルはそんな自分に自覚的でない。彼はまだ真実に気づくことができないのである。ヘルメルはノラに「幸福じゃなかったのかい？」(282)とたずねる。すると彼女は以下のように返答する。

ただおもしろかっただけです。あなたはいつもわたしに対してとても親切でした。でも、わたしたちの家庭はただの遊び部屋にすぎなかったのです。ここでは、わたしはあなたの人形妻だったのです。ちょうど実家ではソパの人形子であったように。そして子どもたちの相手になって遊んでやると、子どもたちがうれしがるように、あなたがわたしの相手になって遊んでくれると、わたしはそれがとてもうれしかったのです。それがわたしたちの結婚だったのです。(282)

この言葉がヘルメルとノラの結婚生活の全てを表しているといっていいたいだろう。「幸福」と「おもしろかっただけ」という間には大きな違いがある。しかし、彼女にとって少し前まで最も壊したくない、自分にはこれしかないという「幸せ」の対象が家庭であったことは確かであろう。家庭の中にいる間は、自分は「幸福」だと確かに感じていたのである。だから、壊れないように結婚生活を必死に守ろうとしてきた。その幸福感は、失えば彼女に自殺を考えさせるほど、彼女の心を支配していた意識である。だが、ヘルメルに責められ、それまですがっていたものを完全に破壊されたからこそ、その幸福が実は本当の意味での幸福ではなく、「おもしろかった」だけなのだ気づくことに至ったのである。彼女は自分による選択ではない趣味を持ち、相手の望むような女性を常に演じてきた。それを誉めてくれるヘルメルがいて、うれしさを感じ、自分自身でも充実しているように感じていた。だがそれはノラ自身の本来の人格からの喜びではないであろう。彼女は自分の意思で選択していないし、従って彼女にとっての本当の趣味もないのである。だからこそ、相手が変わることで趣味もその都度変わってしまう。以前の彼女は、理想の女性を求めるヘルメルに応えることが全てで、自分自身についてまったく考慮しない状態だったのである。そんな彼女が唯一自分で選択したことはヘルメルを助けるためにお金を借りたことであるといえる。その行為が彼女にとっての誇りであったのだ。しかし、ヘルメルに全く理解してもらえず、厳しく非難されてしまった。その自分の唯一の決断を踏みこじられたからこそ、ヘルメルが自分をまるで人形のように扱っていることに気づいたのである。さらに、これまでの自分の幸福感も偽りだったと自覚する。人間が本当の「幸福」を感じるには、他人に与えられるのではなく、自らの意思で選択し、行動するという前提が必要なのではないだろうか。自分で物事を選択して生きていくからこそ、積み重なっていくものと、失っていくものに自覚的であることができ、毎日毎日を貴重に感じることもできるのではないだろうか。そういったことが人間の「幸福」感に繋がるのであると私は思う。

ヘルメルは神聖な義務として、「夫や子どもたちに対する義務」(283)を全うするようノラに諭す。しかし、彼女は「同じように神聖な義務がありますね。」(283)と答え、それは「わたしに対する義務です。」(283)と主張する。これはノラ自身が直接自立に向かって、生きていくということへの誓いである。彼女はこれまで、この義務を考慮せず生きてきた。だからこそ、これから「自立」していくことを決意したのである。ノラは社会に対して、「わたしにはよくわかりませんわーほんとに。でもこれからはそこにはいって行ってよく見つもりですわ。その上で、社会とわたしの、どちらが正しいか、はっきりしたいと思います」(284)と語っている。自立には、このように社会の中に入りしっかりと学び、何が正しいのか見極めていくことが必要とされる。社会とその中の自分を意識した上で、自らの価値基準を定めていき、物事を自分で選択して生きていくことが自立するということなのである。スーやテスはこのような自立はできなかった。スーは社会への反抗心から、

社会をよく見ることができない状態であった。そして、よく見ないで自分の観念によってだけで敵対し続けたために、彼女は最終的に社会に屈服することになってしまうのである。社会に反抗するという意識をすぎたために、逆に自分の意見も影響を受けていってしまったのである。テスにも同様にエンジェルとの関係が彼女の決定権の全てになってしまっているのも、このような自立心はなかったといえるだろう。

物語の最後に、ノラはこのように自立心に目覚め、ヘルメルとの家庭を出て行く。ここで、果たしてヘルメルとの関係を守り続け、自立するという道はノラにとって無理であったのかどうかについて考える必要があるだろう。おそらく、ヘルメルの今の性格では不可能であるだろう。何故なら、彼のノラに対する愛情は相手の真の幸せを願う種類の愛ではないからである。結局自分の思う幸せに無理やりノラを縛り付ける自己愛によるものに他ならない。

しかし、この戯曲の終わりはノラの今後の様々な「未来」を予感させるものである。自立の道を目指したノラの今後は、真の幸福が訪れる可能性が示唆されているようにも、逆に社会の不条理の中で不幸になってしまう可能性も含んでいるようにも思えるのである。物語の終わりが、新しい「始まり」であり、今後の展開の予想が全くつかないのである。テスにもスーにも究極の悲劇が与えられていた。ファンシーも最後に彼女の今後の不幸が予感できる。しかし、初めて自立心を持ったノラは、全く未来の予想がつかない。これから良いようにも、悪いようにも成りえるのである。それは、まるで人生そのものを表しているようではないだろうか。良くも悪くも、自立するということは、本当の意味で「人生」を生きるということともいえるのではないだろうか。実際にノラとヘルメルの関係においてさえ、可能性が与えられている。「ねえ、一わたしはおまえにとって、もう他人以上には決してなれないかい？」(286)というヘルメルに、ノラは「とてもすばらしいことでもおこるようなことでもあれば」(286)という。「それはふたりとも、あなたもわたしも、すっかり変わって」(286)という状況なら復縁もありえるということの意味する。これは、ノラとヘルメルの関係だけではなく、お互いが自立しあった結婚もありえるという理想をイプセンが提示しているということに他ならないであろう。ノラは既に自立を目指しているのであるから。そしてイプセンは「ほんとうの結婚生活」(289)とはそのような自立した人間同士として、お互いを尊敬し合うことを土台とした共存関係であると主張しているのではないだろうか。

結論

以上のように、ヴィクトリア朝時代のヒロインである『ダーバビル家のテス』のテス、『日陰者ジュード』のスー、『緑樹の陰で』のファンシー、『人形の家』のノラを取り上げることで、結婚のあり方について述べてきた。テスとスーの両者は結婚が悲劇へと進んでいったヒロインである。それは結婚における「社会」対「自然」の図式に翻弄されたためであった。テスの場合は社会的価値観の狭さにより、愛する人との結婚が破綻する。一方、スーの場合は男女の愛の「自然性」と、結婚における「社会性」が相対し、矛盾を含み、最後には彼女特有の知的な人格が崩壊してしまう。ハーディは、このようにテスやスーを通して、結婚制度や社会の狭い価値観に対して強い批判意識を表しているのである。ハーディはファンシーの結婚にもしっかりと陰を落としている。

このように、結婚によって不幸へと進む場合は十分に考うる事柄であった。さらに、テスとスーとファンシーの三人には「自立」的でないという共通点があることがわかった。自立的でないことが彼女たちの大きな欠点なのである。そこで、自立に目覚める女性ノラについて考察した。彼女の自立への目覚めは、テス、スー、ファンシーらの不幸な男女の関係とは異なり、未来への可能性を残していることが窺える。

つまり、結婚のあるべき姿においては、お互いが精神的に「自立」しているということが非常に重要なのである。自立した関係とは、お互いに依存的でないということを意味する。従って自立したもの同士の結婚ならば、依存関係ではなく、お互いを尊敬し合い、助け合う共存関係が可能になる。さらに、自立的であることは、自分の人生の選択において自覚的であるため、お互いに反省することができ、相乗効果を生み出すことも可能となるであろう。本稿で取り扱った文学作品を足がかりにして考えると、このようなお互いに自立した男女の関係こそが、結婚のあるべき姿であるという結論が導き出されるのである。

註

- (1) トマス・ハーディ『緑樹の陰で』藤井繁訳、千城、1982年。
- (2) トマス・ハーディ『ダーバビル家のテス』小林清一訳、千城、1989年。
- (3) トマス・ハーディ『日陰者ジュード（上）』川本静子訳、中央公論新社、2007年。
トマス・ハーディ『日陰者ジュード（下）』川本静子訳、中央公論新社、2007年。
- (4) ヘンリック・イブセン『人形の家』杉山誠訳、河出世界文学全集第15巻、河出書房新社、1989年。
- (5) 川本静子『女王陛下の時代』研究社、1996年、54-62。
- (6) 土屋倭子『「女」という制度 トマス・ハーディの小説と女たち』南雲堂、2000年、192。

参考文献

トマス・ハーディ『緑樹の陰で』藤井繁訳、千城、1982年。
トマス・ハーディ『ダーバビル家のテス』小林清一訳、千城、1989年。
トマス・ハーディ『日陰者ジュード（上）（下）』川本静子訳、中央公論新社、2007年。
ヘンリック・イブセン『人形の家』杉山誠訳、河出書房新社、1989年。
川本静子『女王陛下の時代』研究社、1996年。
土屋倭子『「女」という制度 トマス・ハーディの小説と女たち』南雲堂、2000年。

(卒業論文指導教員 金山 愛子)